

第7節 畿内における陪塚について

1 はじめに

西墓山古墳は、一辺20m程度の小型の方墳であるが、多量の鉄製品を埋納する施設が確認された。多量の鉄製品の埋納は、大型前方後円墳の周囲に配置される陪塚の一つの特徴として注目されている。こうした陪塚の様相は、当時の社会構造を解明する糸口となる可能性を秘めており、ここでは畿内の陪塚を整理しまとめてみたい。

2 陪塚研究の現状と課題

1922年高橋健自は、『古墳と上代文化』の中で古墳の諸要素を抽出し、その中で陪塚に触れている。陪塚を主墳に対して陪従して造営された古墳と位置づけ、被葬者を皇族並びに臣下であった可能性を指摘している〔高橋健 1922〕。

森浩一はカトンボ山古墳の調査成果から、前期古墳に通有に認められる一般的な鏡、装身用の玉、宝器的石製品や短甲・武具類を欠き、副葬品の種類が限られ、しかも多量に副葬される特徴を抽出した。古墳被葬者に供される遺物を欠き、人体埋葬の痕跡が認められないことから器物のみを埋納した陪塚の存在を指摘した。さらに人体埋葬の明らかである陪塚と器物のみを埋納した陪塚の両者の存在と後者がやや古く成立した可能性を指摘した〔森 1953〕。

石部正志は、副葬品の配置状況を古墳墳丘施設の発展過程の中に位置づけ、陪塚の出現を主墳の威容を高めるための墓域の拡大過程において成立したものと考えた。陪塚の成立にあたっては器物のみを埋納した「副葬用陪塚」が先に成立し、人体埋葬の認められるものがやや遅れて成立したものとした〔石部 1958〕。この石部の論考は、墳丘施設の発展過程から陪塚の成立を説明しようとしたものであった。しかしながら、人体埋葬のない古墳が存在するか否かにおいては発掘調査においても確証を提示できず、「副葬用陪塚」の存在自体に疑問をもたれた。

西川宏は、陪塚の概念規定を提示している。その概念規定は、規模・施設・副葬品等が量的あるいは質的に劣ること（従属性）、次に同時代に築造されていること（同時代性）、最後に計画的に配置されていること（計画性）の三つの条件を提示した。また陪塚の存在形態の分析から首長の権力行使の実務を処理するための機関の整備を読み取り、各種の権能、職種を分掌する官僚的階層の成立を考えた。こうした陪塚を配置する主墳の被葬者像として、強力な専制支配体制を確立していった大首長であると規定している〔西川宏 1961〕。この西川の論考は、陪塚の成立を社会構造の進展と関連させて論考しており、その後の研究に大きな影響を与えている。

末永雅雄は、大型前方後円墳の周囲に「周庭帯」の存在を指摘し、大型古墳の周囲に随伴する陪塚の配置を「周庭帯」と関連づけている〔末永 1962〕。「周庭帯」は、その後津堂城山古墳などの発掘調査例から、周濠や周堤の痕跡であることが確認された〔大阪府教育委員会 1980〕。

伊達宗泰は、既往の調査成果から、陪塚の埋葬形態を大きく三つの類型に分け、天神山古墳を行燈山古墳の遺物埋納用陪塚とし、陪塚の初現と考えた〔伊達 1963〕。

北野耕平は、アリ山古墳北施設において出土した同種多量の鉄製品の出土状況を各群別々の

「供献」行為として捉え、生産技術の発達と中央政権の周辺に多量の鉄製武器を蓄積した軍事集団の成立を想定している [北野耕 1964a]。一方、野中古墳は主墳墓山古墳の存在を意識しつつ、その副葬品は墓山古墳の被葬者による直接的な所有と管理を離れ、軍事的職掌に関与する別個の集団の管理に委ねられた鉄製武器を基盤として成立したものとして、陪塚の出現を主墳の威容を高めるための墓域の拡大過程で成立したものではないと石部に反論した。またこのような古墳の在り方は武人的性格を表明しえた社会的地位の外的承認があったとした。陪塚の概念については、位置関係の相関性、主墳に対する墳丘及び副葬品の従属性、同時期性、被葬者達の生前の社会的関係を推測できる遺物の存在等を挙げている [北野耕 1976]。

近藤義郎は、古市古墳群の中・小規模の古墳を取り上げ、首長墳に対する随伴古墳という認識のもとに検討を行ない、「最高首長権につらなる職務執行機関中枢を占める中・小首長の少なくとも一部、あるいは最高首長の親族をもふくめて営造されたもの」という評価を与えている [近藤義郎 1987]。

天野末喜は古市古墳群を編年し、その特徴をまとめている。特に菅田御廟山古墳の造営期には、前代は緩やかな序列であった古墳構成に大きな変化が認められ、中型前方後円墳の退潮もしくは欠落によって、較差が極めて大きくなることを指摘している。またこの変化と軌を一にするように小型円墳と方墳が数を増すことを指摘しており、こうした変化から大王権の確立と支配機構の整備という 5 世紀の政治構造を類推している [天野 1986b]。

田中和弘は古市古墳群内の小古墳に着目し、併設型小古墳、独立型小古墳、系列型小古墳に区分しそれぞれの性格について論考している。特に併設型小古墳の被葬者を主墳被葬者を補佐し、特定の職務を分担した人物と想定し、副葬品の構成差を分担職務の差異を表出したものと考え、「首長の近親者で、なおかつ首長の職務を分担し、首長と共に支配機構の中枢を占めたような人格」と想定している [田中和 1986]。

広瀬和雄は、大王墓を抽出し大王に集約される政治動向に言及している。その中で陪塚を、階層構成型古墳群の構成要素の一つとして取り上げ、佐紀古墳群の五社神古墳に認められる小古墳を陪塚の初現と考えている。中期における階層関係の進展と階層構成型古墳群の形成から、「地域支配のシステム化への動きと、それを担う原初的な官僚層の創出という、機構を通じての支配体制」への進展を想定している [広瀬 1987]。

石部は、北野に代表される副葬用陪塚の否定的見解を受け、西墓山古墳の調査成果などから、再度副葬用陪塚の成立について、津堂城山古墳に認められる濠内墳丘のような施設が外堤周囲に展開するように成立、発展したものと自説を補強している [石部 1988]。

田中琢は、大型前方後円墳の周囲に企画的に配置される陪塚群を「衛星式陪塚」と呼び、構造的な社会組織が表現されているものと考え、その被葬者を組織化された各種の権力執行補助者と考えた。さらに 4 世紀後半の古墳の変化を、前方後円墳の成立時より本質的な変化として積極的に評価し、初現的国家の成立を論じている [田中琢 1990]。

藤田和尊は、特定遺物の大量埋納の有無、甲冑保有形態の格差の詳細な検討により、「陪塚」を「主墳の周堤の上に築造されるか、または、ほぼ接する位置にある、ほぼ併行する時期の中小

規模の古墳」と厳密に規定し、前期古墳には「陪塚」が伴う例はなく、後期にも存続しないことを明らかにし、その初現と消長が百舌鳥・古市古墳群の成立と盛衰及び密接に連動していることを論考している。また「陪塚」から出土する甲冑群の様相から、主墳被葬者に直属する原初的官僚層とも言うべき「陪塚」被葬者らに職掌を委ねた、甲冑の集中管理体制の存在を推測している〔藤田1993a〕。また甲冑の出土状況を詳細に検討し、甲冑の集中管理体制の成立とその在地化をもとに軍事組織を論及している〔藤田1993b〕。しかしながら松木武彦から古墳の副葬品としての武器・武具類の埋納は葬送儀礼の結果によるものとする指摘がある〔松木1994a〕。これに対して藤田は甲冑保有形態の詳細な検討から、野中古墳の被葬者は甲冑集中管理体制の体现者として墓山古墳の陪塚に葬られ、生前の職掌に対して甲冑が供献され埋納されたものであり、これらの詳細な検討から甲冑集中管理体制及び軍事組織を論及したと反論している〔藤田1995〕。

このほか辻葩学〔辻葩1993〕等の論考が発表され、陪塚研究に対する見通しを述べている。

近年、陪塚と考えられる小型古墳の発掘調査は、墳丘のみならず墳丘外域施設に及び、主墳である大型前方後円墳と陪塚との配置関係は徐々に明らかになりつつある。ここでは既往の調査成果をまとめ、畿内における陪塚を抽出するとともに、主墳と陪塚の位置的関係や築造時期を個別に整理し、陪塚の特徴を抽出することによって古墳時代の社会構造の変化を考察してみたい。

3 畿内における陪塚

陪塚については、西川概念規定に基づいて抽出を試みた〔西川宏1961〕。特に大型前方後円墳の周堤に接するか、主墳との間に企画性が認められる古墳及び副葬品や遺物に主墳との関連性が読み取れる古墳を抽出していく。また主墳造営時期より遡るものは陪塚から除外した。なお、こうした陪塚は、古市古墳群、百舌鳥古墳群及び佐紀盾列古墳群に顕著に認められ、これらの古墳群を中心に周辺の大規模墳に留意し陪塚を抽出していきたい。時期区分は、和田晴吾の編年観を使用する〔和田1987〕。また主墳と陪塚の位置関係を以下のように類型化を試みた。

(陪塚の位置)

- 1類 主墳後円部正面に位置するもの
- 2類 主墳後円部側面に位置するもの
- 3類 主墳前方部正面に位置するもの
- 4類 主墳前方部側面に位置するもの

(陪塚と主墳の関係)

- a類 主墳外堤に食い込む様に位置するもの
- b類 主墳外堤に接するように位置するもの
- c類 主墳外堤に平行して位置するもの
- d類 主墳墳丘主軸に平行して位置するもの
- e類 主墳との規則性が読み取れないもの

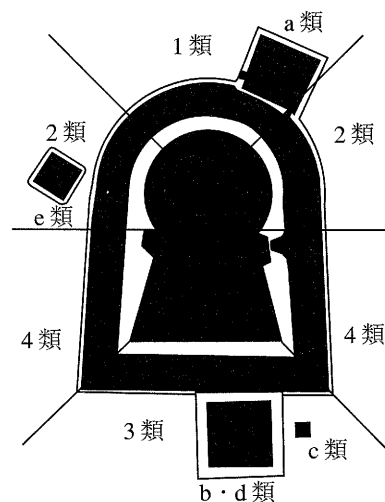


図110 陪塚配置類型図

古市古墳群における陪塚

五期の津堂城山古墳は、二重の周濠、周堤をもつ最古の大王墓と考えられ、前方部内濠内に水鳥形埴輪を配する濠内墳丘を配置している〔天野 1993b〕。しかしながら外堤周囲には企画的に配置された陪塚群は認められない。

六期の仲津山古墳には、後円部側に円墳1基、方墳1基が認められる。後円部正面の外堤外縁に接するように方墳鍋塚古墳が、やや離れて円墳高塚山古墳が位置している。鍋塚古墳の円筒埴輪は、仲津山古墳と同時期の特徴が認められる。高塚山古墳は主体部が粘土槨で覆われた割竹形木棺であり、副葬品の一部が確認されている。また円筒埴輪列が確認されており、埴輪の特徴から仲津山古墳と同時期の築造と考えられる。

同じ六期に位置づけられる墓山古墳には、前節で検討した方墳4基が配置されている。

七期の誉田御廟山古墳には円墳1基、方墳4基が確認されている。くびれ部付近に位置する二ツ塚古墳は、誉田御廟山古墳の築造時期よりも古く、陪塚ではない。前方部正面には珠金塚古墳及び珠金塚西古墳〔一瀬 1989b〕が位置しているが、珠金塚西古墳については、周濠の形状が不整な卵形を呈する可能性が読み取られ〔上田睦 1995c〕、盾塚古墳や鞍塚古墳〔大阪府教育委員会 1996〕と共通点を看取できる。珠金塚古墳及び珠金塚西古墳とも盾塚古墳、鞍塚古墳に継続する首長墓と考えられ〔藤田 1991〕、陪塚からは除外した。

栗塚古墳、東山古墳は誉田御廟山古墳の後円部側面に位置し、いずれも外堤外縁に平行するように配置されている。東馬塚古墳は前方部側面に位置し、二ツ塚古墳によって変形する外堤に平行するように配置されている。栗塚古墳の円筒埴輪は誉田御廟山古墳と同時期の特徴をもっている。前方部正面の主軸に接するように円墳の誉田丸山古墳が位置しており、造出しをもつ可能性や主体部が粘土槨で覆われた割竹形木棺であることが推定されている〔天野 1993c〕。副葬品には、金銅製鞍金具が認められ〔吉田珠 1994b〕、時期的に誉田御廟山古墳よりやや降る傾向を読み取れる。

誉田御廟山古墳では方墳を主体として外堤外縁に平行するように陪塚が位置している。なお、後円部正面に陪塚が認められないのは、大王墓では誉田御廟山古墳に限られている。誉田御廟山古墳の後円部正面に誉田八幡宮が位置しており、陪塚が削平を受け消失したためか、誉田御廟山古墳の特異性であるのかは速断できない。

八期の市野山古墳には、後円部側を主体として帆立貝形前方後円墳1基、円墳5基、方墳1基を確認できる。唐櫃山古墳は後円部正面に位置する帆立貝形前方後円墳であり、市野山古墳外堤に食い込むように位置している。長持山古墳の円筒埴輪は、市野山古墳の円筒埴輪と比較してやや新しい特徴をもっていることが確認されている〔一瀬他 1980〕。

九期の岡ミサンザイ古墳には、後円部側に前方後円墳鉢塚古墳1基が認められるが、配置における企画性は認められない。しかしながら円筒埴輪の特徴などから岡ミサンザイ古墳と同時期の造営と考えられ、周辺に継続性の考えられる古墳は認められないため、陪塚として扱った。前方部正面の外堤からやや離れた位置に円墳と考えられる落塚古墳が位置していたが、墳丘は削平され内容は不明である。

一〇期の白髪山古墳の後円部正面には、墳丘主軸を揃えるように墳丘長46mの小白髪山古墳が位置しており、陪塚的な位置関係が読み取れる。この期を最後に古市古墳群における陪塚は廃絶していく。

百舌鳥古墳群における陪塚

六期の石津丘古墳の周囲には陪塚7基が分布していたと伝えられているが、確認できるのは後円部正面の3基の古墳と前方部側面の1基の古墳である。後円部正面に位置する七観山古墳は4基の施設が確認されており、7領の甲冑の他、金銅製帯金具などが出土している。遺物の特徴から築造時期は七期と考えられ、主墳石津丘古墳よりやや降る時期に造営されたと考えられる。

七期の大型前方後円墳は認められないが、墳丘長146mのいたすけ古墳の後円部側に陪塚的配置をとる方墳2基（吾呂茂塚古墳、善右エ門山古墳）の存在が知られている。

八期の大山古墳では、前方後円墳2基、帆立貝形前方後円墳5基、円墳6基、方墳2基の陪塚が配置されている。後円部側に位置する2基の円墳（大安寺山古墳・茶山古墳）は中堤に食い込むように配置されている。一方、前方部正面に位置する3基の古墳は主軸を前方部正面外堤ラインに平行させ、後円部外堤側に位置する丸保山古墳は、大山古墳主軸と平行させている可能性が認められる。収塚古墳は、周濠の形状、埴輪の特徴及び時期や墳形が前方後円墳であることから陪塚とすることに否定的な見解がある〔樋口・十河1996〕。大山古墳の前方部に近接して造営され、時期も大山古墳よりやや新しい特徴をもつものの、同じ八期の範疇に収まるためここでは大山古墳を構成する陪塚と考えたい。円筒埴輪の特徴からは、塚廻古墳、源右衛門山古墳が大山古墳とほぼ同じ時期と考えられ、収塚古墳は若干新しい特徴が指摘されている。また円筒埴輪の大きさが、収塚古墳は径20cm程度、塚廻古墳では径40cmと25cm程度の二つのタイプ、源右衛門山古墳では、径45cm程度を主体として採用しており、陪塚における円筒埴輪の規格に差を生じている〔樋口・十河1996〕。

土師ニサンザイ古墳は二重の周濠をもつと考えられ、後円部側に3基の円墳が確認されているが規模及び内容は不明である。前方部正面に位置するこうじ山古墳は、造営時期が主墳より遡る可能性があり陪塚ではないと判断した〔奥田豊1973〕。

二重の周濠をもつ田出井山古墳は、墳丘長148mを測る。側面に外堤から離れた2基の方墳が宮内庁によって陪塚とされている〔森村編1981〕。しかしながら内容も不明な点が多く、配置における企画性も認められない。また、墳丘長186mの御廟山古墳の後円部側には陪塚的配置をとる円墳2基（カトンボ山古墳、万代山古墳）が認められる。カトンボ山古墳は、発掘調査によって滑石製模造品が大量に出土している〔森・宮川1953〕。

佐紀盾列古墳群における陪塚

三期の五社神古墳には、後円部側面の外堤外縁に宮内庁の指定する、は号陪塚が認められる。発掘調査によって古墳でない可能性が指摘されている〔池田1996〕。また後円部北西のい号陪塚及びろ号陪塚については、藤田和尊の指摘する点と同様であり、陪塚と考えない〔藤田1993a〕。

四期の宝来山古墳及び佐紀陵山古墳には陪塚的配置をとる古墳は認められない。

五期の石塚山古墳の主体部は竪穴式石槨に長持形石棺を埋置したのと考えられる〔鐘方

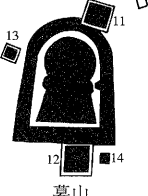
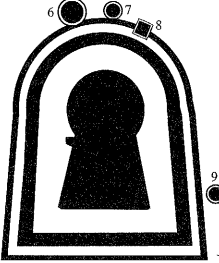
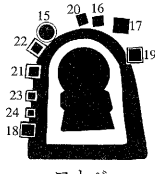
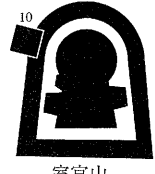
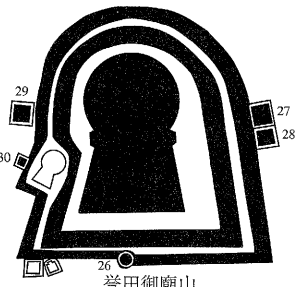
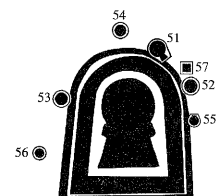
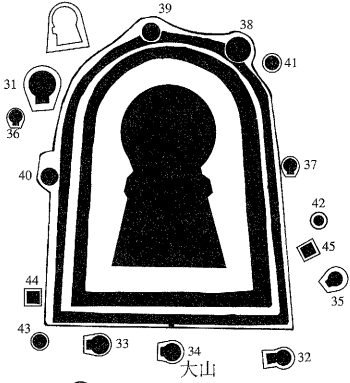
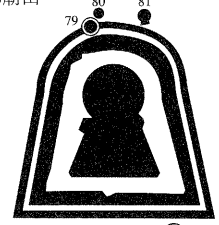
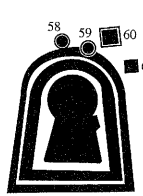
	古市古墳群	百舌鳥古墳群	佐紀古墳群	その他の地域
五期	 津堂城山		 石塚山	
六期	 仲津山  墓山	 石津丘	 コナベ	 室宮山
七期	 誉田御廟山	 いたすけ	 ウワナベ	 久津川車塚
八期	 市野山	 大山  御廟山  田出井山  土師ニサンザイ	 ヒシアケ	 太田茶臼山  雲部車塚  淡輪ニサンザイ
九期	 岡ミサンザイ			
一〇期	 白髪山			

図 111 陪塚変遷図

表 13 陪塚一覧表

古墳 名称	時 期	規 模	番 号	陪塚名称	墳形	規 模	時 期	配 置	格 差	文 献	古墳 名称	時 期	規 模	番 号	陪塚名称	墳形	規 模	時 期	配 置	格 差	文 献				
石塚山	五	218	1	い号陪塚	方	40	-	1b	18	ト部1995	いたすけ	七	146	46	善右エ門山	方	30	-	1a	21	堺市教育委員会1990				
			2	ろ号陪塚（西）	方	40	-	1b	18	末永1975				47	吾呂茂塚	方	25	-	1b	17					
			3	ろ号陪塚（東）	方	40	-	1b	18		ウワナベ	七	270	48	大和3号	円	10	-	1e	4	末永1949a				
仲津山	六	280	4	高塚山	円	50	六	1e	18	一瀬1986	49			大和6号	円	30	七	1a	11	末永1949b					
			5	鍋塚	方	50	六	1b	18	新開1993b	50			大和5号	方	13	八	1d	5	末永1949c					
石津丘	六	360	6	七観山	円	50	七	1b	14	樋口・岡崎・宮川1961	市野山	八	230	51	唐櫃山	帆	53	八	1a	23	北野耕1962				
			7	七観音	円	25	六	1b	7					52	長持山	円	40	八	2b	17					
			8	寺山南山	方	38	-	1a	11	佐藤1993a				53	宮の南塚	円	40	九	2a	17	天野1993c				
			9	狐塚	不	-	-	4e	-					54	御曹子塚	円	37	-	1e	16					
室宮山	六	238	10	ネコ塚	方	70	六	2a	29	木許・藤田1996				55	赤子塚	円	34	九	2b	15	天野1996c				
			墓山	六	225	11	向墓山	方	68	六				1a	30	高野・伊藤1990	56	衣縫塚	円	20	-	4e	9	天野1993e	
12	浄元寺山	方				67	七	3b	30	上田睦1989				57	小具足塚	方	20	八	2d	9					
13	野中	方				37	八	2e	16	山田1991				58	ろ号陪塚	円	30	-	1b	14	山川1993				
コナベ	六	204	14	西墓山	方	20	七	3c	8	山田1990				59	は号陪塚	円	27	-	1a	12	小栗1994				
			15	大和21号	円	42	-	1b	21	末永1975	60	に号陪塚	方	42	-	1c	19	山川1993							
			16	大和17号	方	37	-	1e	18		61	ほ号陪塚	方	27	-	2c	12								
			17	大和18号	方	37	-	1e	18		御廟山	八	186	62	カトンボ山	円	50	八	1a	27	森・宮川1953				
			18	大和26号	方	32	-	4a	16					63	万代山	円	25	-	2b	13	堺市教育委員会1990				
			19	大和20号	方	30	-	2a	15		太田茶臼山	八	230	64	C号陪塚	前	18	八	2c	8	泉本1974				
			20	大和16号	方	26	-	1e	13					65	A号陪塚	円	21	八	1e	9					
			21	大和23号	方	26	-	2a	13					66	B号陪塚	円	19	八	1e	8					
			22	大和22号	方	24	-	2b	12		67	は号陪塚	円	-	-	2b	-								
			23	大和24号	方	18	-	4a	9		雲部車塚	八	140	68	い塚	円	34	-	1a	24	篠山町教育委員会1984				
24	大和25号	方	11	-	4a	5	69	ろ号陪塚	円					30	-	2a	21								
車塚	七	180	25	梶塚	方	50	七	1a	28	小泉1996				70	い号陪塚	方	25	-	2d	18					
誉田御廟山	七	425	26	誉田丸山	円	50	八	3a	12	吉田珠1994b	淡輪ニサンザイ	八	180	71	い号陪塚	円	35	-	2e	19	末永1975				
			27	東山	方	50	七	2b	12	天野1993d				72	ろ号陪塚	円	25	-	1a	14					
			28	アリ山	方	45	七	4b	11	北野耕1964a				73	に号陪塚	円	25	-	1b	14					
			29	栗塚	方	43	七	2c	10	吉澤1994b				74	は号陪塚	円	20	-	1a	11					
			30	東馬塚	方	30	七	4c	7	笠井1994				75	へ号陪塚	方	30	-	2e	17					
大山	八	486	31	丸保山	前	87	八	2d	18	中井1993		田出井山	八	148	76	ほ号陪塚	方	25	-	2a	14	佐藤1993b			
			32	収塚	前	65	八	3c	13	樋口・十河1996					77	鈴山	方	22	-	4b	15				
			33	竜佐山	帆	67	八	3c	14	中井1993	土師ニサンザイ	八	290	78	天王	方	10	-	2c	7	佐藤1993b				
			34	孫太夫山	帆	56	八	3c	12					79	聖塚	円	15	-	1a	5					
			35	新知見の古墳	帆	46	-	4e	9	中井1977				80	聖の塚	円	-	-	1e	-					
			36	菰山	帆	36	-	2e	7	中井1993	岡ミサンザイ	九	242	81	経塚	円	-	-	1e	-	天野・小西・高山1989				
			37	塚廻	帆?	35	八	2b	7	樋口・十河1996				82	鉢塚	前	60	九	1e	25					
			38	大安寺山	円	60	-	1a	12		白髪山	〇	115	83	落塚	円	27	九	3e	11					
			39	茶山	円	55	-	1a	11	中井1993				84	小白髪山	前	46	〇	1d	40	吉澤1994c				
			40	樋の谷古墳	円	47	-	4a	10					墳形：前・・・前方後円墳 帆・・・帆立貝形前方後円墳 円・・・円墳 方・・・方墳											
			41	源右衛門山	円	40	八	2e	8	樋口・十河1996				規模：m 格差：墳丘格差指数＝陪塚墳丘長／主墳墳丘長×100											
			42	鏡塚	円	26	八	4e	5	嶋谷・白神1996															
			43	狐山	円	23	-	3e	5																
			44	銅亀山	方	26	-	4c	5	中井1993															
			45	夕雲1丁南	方	20	-	4e	4																

1993]。陪塚は後円部側に3基の方墳が主墳外堤に接するように位置しており、陪塚間の墳丘規模に差は認められない。ろ号陪塚（東）が他の2墳と比較してやや内側に位置している。

六期のコナベ古墳には外堤に食い込むように1基の円墳と9基の方墳が後円部側を主体として配置されている。後円部に位置する円墳の大和21号墳は、宮内庁によってヒシアゲ古墳の陪塚として扱われているが、コナベ古墳の外堤に接する位置にあり、コナベ古墳の陪塚と考えた。

七期のウワナベ古墳は二重の周濠が確認されている[安井1992]。後円部正面の外堤に接するように2基の円墳と1基の方墳を配置している。大和4号墳はこれらの古墳より外側に位置しており、ここではウワナベ古墳陪塚から除外した。前方部側には平塚2号墳が確認されており、円筒埴輪の製作技法がウワナベ古墳の円筒埴輪と共通する特徴が確認されており、陪塚である可能性が考えられている。しかしながら近在に平塚1号墳[町田1974]など同一系譜を読み取れる古墳が存在することなどから陪塚からは除外した。副葬品の内容が明らかな大和6号墳は、鏡や武具及び陪塚被葬者に供する装身具類が出土していないことが特徴的である。

八期のヒシアゲ古墳は二重の周濠をもち、後円部側に2基の円墳と2基の方墳が認められる。後円部側に位置するろ号陪塚はヒシアゲ古墳外堤の幅を減じ、外堤に食い込むような位置に配置されている[小栗1994]。小栗は、ろ号陪塚が主墳であるヒシアゲ古墳より時期が遡る可能性を指摘しており、陪塚でない可能性を指摘している。また2基の方墳の配置に特異性が認められ、墳丘の一辺を前方部側面の外堤ラインと平行させるように造営された可能性がある。ヒシアゲ古墳は、東及び東南側が丘陵尾根及びコナベ古墳に規制され、前方部側に陪塚を配置することができなかったことがその要因である可能性を指摘できる。

その他の地域

三期には大和の行燈山古墳に3基の前方後円墳が前方部側堤に近接して築造されている。これらの古墳は柳本古墳群中の行燈山古墳を盟主墳とする一支群に属するものとし、陪塚ではないと理解することが妥当であるとの指摘がある[藤田1993a]。

六期には大和の室宮山古墳の後円部側外堤に食い込むように一辺70mの方墳ネコ塚古墳が配置されている[木許・藤田1996]。七期には、山城の久津川車塚古墳の後円部外堤に食い込むように一辺50mの方墳梶塚古墳が配置されている。久津川車塚古墳は、竪穴式石槨に長持形石棺を納めており、竪矧板鋸留衝角付冑の出土から七期初頭段階に位置づけられている[和田1987]。梶塚古墳は、竪穴式石槨に木棺を埋置しており、出土遺物の詳細は不明であるが、鏡、武具の出土は認められなかった。梶塚古墳には有黒斑と無黒斑の埴輪が樹立されており[小泉1996]、曲刃鎌の石製模造品が確認されていることから久津川車塚古墳と同様七期初頭段階に位置づけた。

八期には摂津に太田茶臼山古墳が造営されており、前方後円墳1基、円墳3基が現在確認できる。後円部側に配置されているB号陪塚は、径約19mの円墳で西側に造出しが付設されている。後円部側面に位置するC号陪塚は墳丘長18m程度の前方後円墳と考えられ、他の陪塚群と比較して築造年代がやや後出する可能性が示唆されている[泉本1974]。丹波には雲部車塚古墳が後円部正面に円墳1基、側面に円墳1基、方墳1基を配置している[篠山町教育委員会1984]。

和泉の最南端に位置する淡輪ニサンザイ古墳には、後円部正面に円墳3基、側面に円墳1基と

方墳2基が位置しており、現状ではいずれも外堤から離れて位置しているように見える。しかしながら陪塚群は、後円部外堤に平行するように弧状に位置しており、後円部外堤外側12～20 mには外堤に平行する弧状の畦畔が認められる。前方部正面では、畦畔は明瞭ではないが、前方部側面においても外堤に平行するような畦畔が認められることから、淡輪ニサンザイ古墳には二重の周濠、周堤の存在する可能性が考えられる。顕著な遺構は確認されていないものの〔藤永1987〕、二重の周濠、周堤を復元し陪塚との配置関係を読みとった。

4 陪塚の様相

ここでこれらの古墳群で抽出された陪塚の様相をまとめていきたい。

陪塚の配置については、全時期をととして後円部側を主体として配置されている。後円部正面に配置されている陪塚は全体の45%、後円部側面を含めると全体の75%が後円部側に配置されている。陪塚は五期の石塚山古墳や六期の仲津山古墳に認められるように成立当初より後円部を意識して配置されており、津堂城山古墳にみられる前方部側の濠内墳丘から発展して陪塚が成立したとは考えにくい。

次に時期別に特徴をみると、前方後円墳の周囲に企画性をもって位置する陪塚は、五期の石塚山古墳を初現とする。石塚山古墳の陪塚群は、一辺40 m程度の方墳で主墳との墳丘格差指数は18を示す。同じ五期の津堂城山古墳には、外堤に平行するように配置されている陪塚は認められない。この時期の陪塚については調査例もなく不明な点が多い。この期には陪塚相互の墳形及び規模に差は認められない。

六期の陪塚は、円墳と方墳を後円部側を中心に配置しているもの（石津丘古墳、仲津山古墳）と方墳を主体とし外堤外縁に接するように配置しているもの（墓山古墳、コナベ古墳）に分けられる。こうした差異は、主墳の規模によって配置される陪塚群の構成に差を生じたものか、もしくは時期差を内包していることが考えられる。

石津丘古墳と周囲に配置される陪塚の内、最も墳丘長の大きい七観山古墳と主墳との墳丘格差指数は14で、石塚山古墳陪塚群と比較して規模における隔絶性は進行している。一方、墳形は円墳の採用が認められ、墳形による格差は減少している。墓山古墳の周囲に配置される陪塚群はいずれも方墳であるが、最大規模の陪塚と最小規模の陪塚の墳丘長の差は48 mを測り、陪塚相互の墳丘規模に差をもっている。

七期には誉田御廟山古墳に方墳を主体とする陪塚群が認められる。主墳である誉田御廟山古墳が隔絶性をもって大型化するとともに、墳丘格差指数は12を示し一層隔絶化が進行している。また同一主墳に配置される陪塚の墳丘長の差の最大は30 mで、陪塚群相互の墳丘長の格差は六期と比較して縮小傾向にある。

八期には主墳の壮体化、隔絶化がピークを迎える時期である。主墳に配置される陪塚は、主墳の巨大化に伴いこの期に最もその数を増加させる。墳丘格差指数は9を示し、主墳と陪塚の規模において最も隔絶化が進行する。しかしながら陪塚相互の墳丘長の差は最大67 mを測り、墳形は円墳、帆立貝形前方後円墳、前方後円墳が認められる。

表 14 陪塚出土副葬品一覧

古墳名称	墳形規模	時期	内部構造	鏡・銅製品	玉・石製品類	武具	武器	馬具	鉄製農・工具	その他	備考
高塚山古墳	円墳 径50m	六	粘土槨 割竹形木棺		碧玉製管玉1 ガラス小玉8		刀7、劍7 鉄鏃約400、ホコ11		鋤先19、斧28 鋤1、鑿3、鋸4	革盾3	北野耕 1976
室ネコ塚古墳	方墳 一辺70m	六	壁穴式石槨?			衝角付盾 三角板革綴短甲、頭甲	刀、劍 鉄鏃				藤田 1985
七蔵音古墳	円墳 径25m	六			碧玉製琴柱形石製品						森 1972
梶坂古墳	方墳 一辺50m	七	壁穴式石槨 木棺		滑石製鏃3 不明1				鋤先11以上、鏃10以上 手鏃11以上 刀子31以上、異形鏃2以上	籠目土器	西谷 1965
西盛山古墳	方墳 一辺20m	七	東列 木櫃直葬				刀42、劍36 短劍13 ホコ1、ヤリ87 (木櫃外) 短劍70				
			西列 木櫃直葬		滑石製鏃1以上 滑石製斧10以上		短劍14 刺突具6以上 (木櫃外) 短劍39		鏃237以上、手鏃72以上 鋤先294以上、斧139以上 刀子45以上、鏃102以上 異形鏃46以上、鑿132以上 鏃9以上、鋸12以上		
アリ山古墳	方墳 一辺45m	七	中央施設 木櫃直葬				鉄鏃70 ホコ43		鋤先2、鏃6 斧8、蕨手刀子5	水銀朱入土師器 (蓋) 1	
			北施設 木箱直葬				刀77 劍8 鉄鏃1542 ホコ9		鋤先49、鏃201 斧134、蕨手刀子151 鋤14、異形鏃4 鑿90、鏃1、鋸7	土製丸玉11 鉤状鉄器412	北野耕 1964a
七親山古墳	円墳 径50m	七	裸床状 施設		三角板革綴式衝角付盾4 堅削細板鉄衝角付盾1 三角板革綴短甲残欠3以上 三角板鉄衝角短甲残欠1 頭甲2 三角板革綴頭甲2、肩甲		泰瑞頭大刀1 刀4以上 劍3 鉄鏃約140 ホコ2	鉄製轡 兵庫銀付鍔金具 絞具 鉄地金銅装辻金具状品	斧5 鎧1	不明鉄製品 筥	末永 1933
			西槨 木棺				刀3 鏃数十本	鍔金具1、轡1 木芯鉄板張輪證1 三環鈴1、絞具 革金具			
			東槨	金銅製帯金具		衝角付盾1(型式不明) 三角板革綴式衝角付盾1 三角板平行四辺形板併用 革綴短甲1 長方板革綴短甲1 頭甲1、肩甲2	短劍6		斧2		樋口・ 岡崎・ 宮川 1961
			粘土槨				刀120～130 劍25～30 蛇行状鉄劍2 ホコ4 素環頭残欠2				
			採集		滑石製勾玉2		劍形鉄製品1				
大和6号墳	円墳 径30m	七	粘土槨		滑石製鏃6、 滑石製斧1				鏃134、鋤先179、斧102 刀子284、鋸9、鉄鋸872		末永 1949b
大和5号墳	方墳 一辺13m	八		金箔片	滑石製双孔円板1		鉄鏃 石突	輪證 蜘蛛手形鉄製品			末永 1949c
野中古墳	方墳 一辺37m	八	第1列 木櫃直葬		三角板革綴留式短甲4 横切板革綴留式短甲3 三角板革綴式連付短甲3 小孔鉄留式肩庇付盾7 革製衝角付盾3、草摺1		刀8 劍3				
			第2列 木箱? 直葬		碧玉製管玉2	三角板革綴留式短甲1 小孔鉄留式肩庇付盾1	鉄鏃625		刀子2 鋤	須恵製小型土器4 同蓋3	
			第3列 木櫃直葬	金銅金具 13片	石臼・杵1		刀1 鉄鏃115		斧30 鉄鋸		
			第4列 木櫃直葬				刀145、劍13 ホコ3				北野耕 1976
			第5列 木櫃直葬						鏃2、鋤先11以上 U字型刃先4以上、手鏃35 鋤、刀子形鏃2、角棒形鏃2 鏃7、刺突具2、鉄鋸		
			墳頂		滑石製勾玉1 滑石製鏃2 滑石製斧1 滑石製刀子81 滑石製紡錘車1 土製紡錘車2					須恵質高坏1、蓋4 台付拵1、蓋21 有跡土器4 鉢台・高坏脚台26 土師器類1、蓋2 高坏56	
			周濠		滑石製勾玉3 滑石製劍形3 滑石製有孔円板2 滑石製白玉41297以上						山田 1991
カトンボ山古墳	円墳 径50m	八	粘土槨? 木棺?	位至三公鏡1 無文小鏡	滑石製子持勾玉4 滑石製勾玉725 滑石製斧6 滑石製鏃13 滑石製刀子360 滑石製鏃1 滑石製双孔円板1 滑石製白玉約20,000		刀約4 劍約7 鉄鏃20 ホコ1 刀子4、斧57	蜘蛛手形鉄製品2			森・ 宮川 1953
登田丸山古墳	円墳 径50m	八	粘土槨?	帯金具		鉄留式短甲	刀 鉄鏃約20 ホコ3 鹿角製刀装具	金銅製帯金具2 鉄地金銅張鍔板付轡1 金銅製雲珠			田中香 1985 吉田珠 1994b
唐稚山古墳	竪立貝形 前方後円墳 墳丘長53m	八	壁穴式石槨 冢形石棺	金銅三輪玉	ガラス丸玉 ガラス小玉計937 銀製小鍔金具1	三角板鉄留式短甲2 肩甲2、頭甲2 小孔鉄留式衝角付盾2 小孔鉄留式肩庇付盾2 鉄地金銅張鍔金具1	刀1 劍1 鉄鏃約50 直弧文付鹿角製 刀装具1	鉄地金銅張「」字形轡1 轡 絞具			北野耕 1962
長持山古墳	円墳 径40m	八	壁穴式石槨 冢形石棺2	神人画像鏡 金銅三輪玉1 金銅製帯金具	ガラス小玉	短甲1、挂甲1 肩甲1、頭甲1 鏃甲2、蕨手、肱当 衝角付盾2	刀 鉄鏃 ホコ	鉄地金銅張鉄金具 轡 輪證 否案	U字形刃先 鏃	須恵器	小林 1961 北野耕 1976
塚原古墳	竪立貝形 前方後円墳? 墳丘長35m	八	木櫃直葬?	変形四獣鏡1 変形五獣鏡1	勾玉? 碧玉製管玉4 碧玉製短玉70 ガラス小玉約1000 滑石製白玉数百		刀2～3 劍1			朱が遺存	大道 1912

九期になると、主墳周囲に配置される陪塚は急激に減少し、主墳と陪塚の墳丘格差指数は25を示し、急激に墳丘長の格差は縮小していく。陪塚の墳形においても方墳は認められず、円墳と前方後円墳が採用されており、主墳との墳形の格差は縮小していくと同時に、配置の企画性も薄れていく。岡ミサンザイ古墳には後円部側に前方後円墳鉢塚古墳が位置しており、両者の密接な関係を想起させるが、配置における企画を見いだすことはできない。これ以降主墳の規模は急激に縮小する。一〇期の白髪山古墳は、後円部側の主軸延長上に1基の前方後円墳（小白髪山古墳）を配置しており、墳丘格差指数は60を示す。最後の陪塚的配置をもつ古墳として注意したい。

以上のことから主墳の周囲に企画的に配置される陪塚は五期に、主墳と陪塚の墳丘長の格差及び陪塚相互の格差が小さい形で成立する。成立時の陪塚は方墳であり、主墳との墳形による格差は最も大きい。六期に入ると陪塚に円墳が採用され、六期から七期に陪塚は方墳を主体としながら円墳、帆立貝形前方後円墳を含む構成に変化する。この期には陪塚相互の墳形及び規模の格差が大きくなる。八期には主墳の墳丘長が隔絶的に巨大化し、陪塚群の構成は円墳、帆立貝形前方後円墳を主体とする構成に変化し、前方後円墳の採用も認められる。陪塚相互の格差と陪塚の数はこの期に最大となる。しかしながら七期と比較して前方後円墳を採用することによって、主墳と陪塚の墳形の格差は縮小する。九期には陪塚はその数を急激に減らすとともに、規模及び墳形の格差は最小となる。古市古墳群では前方後円墳を陪塚として配置している白髪山古墳が認められるが、この古墳を最後に主墳周囲に配置される陪塚は廃絶していく。

次に陪塚の副葬品の変化を時期別にみていきたい。

六期には、鏡の副葬は認められず、装身具の副葬は希少である。室ネコ塚古墳では武具の副葬が認められる。七期には依然鏡の副葬は認められず、装身具の副葬も認められない。アリ山古墳や西墓山古墳、大和6号墳にみられる多量の鉄製武器や鉄製農・工具の埋納が特徴である。また七観山古墳には多量の鉄製武器とともに、多量の武具の埋納が認められ、金銅製帯金具の出土も確認されており、八期と同様の副葬品組成を示している。八期には、鏡や装身具の副葬が認められ、多量の武具の埋納や、多量の滑石製模造品の埋納とともに陪塚被葬者個人に供される金銅製品の副葬が認められる。陪塚副葬品にみられるこうした時期的変化は、古墳祭式の変化を表出しているとともに、陪塚被葬者の性格をも示唆しているものと考えられる。

これらの陪塚の様相をまとめておきたい。

- 1 陪塚は主墳後円部側を主体として配置されていること。
- 2 陪塚は、大王墓以外の大型古墳及び中型古墳にも認められること。
- 3 主墳周囲に企画的に配置される陪塚は五期に成立し、八期に最も整備され、九期には急激に廃絶していくこと。
- 4 陪塚相互の格差は、成立当初顕著に認められないが、その発展に伴い大きくなるとともに、廃絶時には主墳との格差は急激に縮小する傾向が認められること。
- 5 同一主墳に配置される陪塚は、各々規模、墳形、築造時期、主体部の構造や副葬品の構成等に差異をもつこと。
- 6 陪塚出土副葬品は、特徴的な構成を持ち、時期的変遷を辿ることができること。

5 陪塚の性格

陪塚の変遷から陪塚の性格について考えてみたい。なお石部正志の指摘するとおり、人体埋葬を行わず、副葬品のみを大量に納めた「副葬用陪塚」と人体埋葬を主体とした陪塚を区分し考えていく必要はあるが〔石部 1984〕、外観から両者を区分することは困難である。ここでは「副葬用陪塚」の存在に留意しつつも、陪塚の性格や陪塚被葬者の性格を考えていきたい。

五期の石塚山古墳に配置されている陪塚は成立当初方墳を採用すると共に、陪塚相互の格差は規模、墳形とも殆ど認められない。こうした事象を積極的に評価するならば、陪塚成立時には同一階層の陪塚被葬者像を想定できる。六期においては、円墳と方墳の両者を配置しており、陪塚被葬者間に格差を生じている。

八期において陪塚に採用される帆立貝形前方後円墳は、鳥居前古墳〔都出監 1990〕や盾塚古墳〔大阪府教育委員会 1996〕が初現と考えられ、陪塚成立時の五期には既に墳形の成立が認められる。帆立貝形前方後円墳が陪塚の成立時に墳形として採用されていないことは陪塚の被葬者像を探る重要な情報である。六～七期にかけて陪塚が方墳を主体として構成され、八期には円墳、帆立貝形前方後円墳を主体とする構成へ変化することは、陪塚成立当初の陪塚被葬者の階層の相対的な低さを示すとともに、六～八期には円墳、帆立貝形前方後円墳を造営しうる階層へ変化したことが考えられる。九期には陪塚被葬者は前方後円墳を造営しうる階層へと変化しており、主墳との規模の格差も少ないことから陪塚被葬者の階層の上昇が読み取れる。

次に陪塚の副葬品の組成をみてみたい。六期の陪塚の副葬品は、仲津山古墳に配置される高塚山古墳で明らかになっている。高塚山古墳副葬品の示す特徴は、同時期の豊中大塚古墳〔柳本編 1987〕と比較すると宝器的色彩をもつ遺物の寡少性である。七期のアリ山古墳主体部と考えられる中央施設の副葬品は、水銀朱入りの土師器とともに、鉄製農・工具が納められていた。一方北施設には、同種多量の鉄製武器や農・工具が埋納されていた。同時期の首長墓とされる五条猫塚古墳出土副葬品〔網干 1962〕と比較して甲冑及び鏡が確認されていないことが特徴的である。

六～七期における陪塚副葬品の特徴としては、被葬者個人に副葬される装身具類が極めて少ないか欠落しており、前期古墳に一般的に副葬される鏡を欠いていることが挙げられる。古墳の墳丘規模から推定される副葬品と比較して陪塚の被葬者個人を表出する副葬品は極めて貧しいことが挙げられる。

また墳形及び墳丘規模が在地首長墓と目される古墳と比較して劣っているにも関わらず、陪塚に埋納された多量の鉄製武器や農・工具は、圧倒的な量が確認されている。同種多量に埋納される鉄製武器や農・工具は陪塚の被葬者個人の権力を表出するものではなく、主墳被葬者の権威を視覚的に表出するもので、その行為からは葬送儀礼の壮大化の進行が読み取れるとともに、それを可能とした鉄資源の供給体制及び生産体制の掌握が読み取れる。

八期における陪塚副葬品からは、金銅製帯金具や鏡、装身具としての玉類や馬具が副葬されており、多量の武具を埋納する古墳も認められる。七期に特徴的な多量の鉄製武器の埋納傾向も認められる。八期には陪塚被葬者個人の権威を表出する副葬品が認められる。こうした遺物はいずれも陪塚被葬者系譜の継続性を示す副葬品ではなく、あらたな威信具として陪塚被葬者に下賜さ

れた性格をもつ。

こうした陪塚副葬品の時期的変化からは、古墳祭式における儀礼具の時期的変化を読み取ることができる。七期における多量の鉄製武器及び農・工具の多量埋納は、鉄資源の潤沢な供給体制の掌握と、生産体制の整備進展を背景に、多量の鉄製品に威信具としての性格を付与した結果として、古墳に埋納されたものとする。こうした古墳祭式における多量の鉄製武器や農・工具の埋納は、七～八期にかけて甲冑の生産体制の整備・進展に伴い武具の多量埋納へと変化したことが想定される。滑石製模造品の多量埋納もまたこうした古墳祭式の変遷の中に位置づけられる可能性が認められる。

六～七期の陪塚出土副葬品は、陪塚被葬者の首長系譜の継続性を表出する副葬品が脆弱であり、主墳との墳形による格差は大きい。しかし墳丘は一定の規模を保持している。こうしたことから陪塚被葬者は、在地に基盤をもつ有力首長ではなく、これらの首長権から隔絶した位置にある人物である可能性も考えられ、主墳被葬者の権力のもと一定の墳丘規模をもつに至った人物と考えておきたい。また八期には新たな威信具として金銅製帯金具といった金銅製品を副葬した陪塚が認められ、陪塚被葬者個人の権威を表出する階層へ転化していったことが窺える。

次に同一主墳に配置される陪塚群は築造時期に差が認められる。野中古墳や七観山古墳のように主墳より時期は降るものの、副葬品からは主墳被葬者との密接な関連性を想起させる陪塚が認められた。こうした事象から主墳被葬者と陪塚被葬者との関係を考えてみたい。

陪塚被葬者が大王権に組織化された集団と仮定するならば、大王の死によって、陪塚被葬者個人は次期大王に継承され掌握される性格をもっているものと考えられる。しかしながら、時期差をもった陪塚が同一主墳に配置されていることは、陪塚被葬者が大王権に組織化された関係にあるのではなく、主墳被葬者との直接的な従属関係のもと、主墳周囲に造墓を許された人物と想定できる。また大王墓以外の古墳にも陪塚が認められることなどからもこうした想定を首肯することができる。

同一主墳に配置される陪塚の墳形や規模の差異は、築造時期による差異と陪塚被葬者の階層的な差異を内包している。陪塚被葬者は、その成立時には主墳被葬者に最も従属的な階層であったと想定できる。しかしながら陪塚の副葬品の時期的な変化は主墳被葬者のみならず自己の身分を表出する器物を埋納するように変化し、墳形も方墳から円墳・帆立貝形前方後円墳へ、さらには前方後円墳へと変化する。こうした変化からは陪塚被葬者の相対的階層が向上したものと考えられる。陪塚被葬者は強大な主墳被葬者の権力のもとで、徐々に自己の階層を上昇させていった結果と考えたい。陪塚被葬者は大王の公的権力の一部を担うことによって、徐々にその権力を掌握し、自己の階層の向上を図ったものと考えておきたい。

九～一〇期における陪塚の廃絶は、古墳祭式の変化が大きな要因であると考えられるが、陪塚被葬者の階層の向上とともに、陪塚被葬者が主墳被葬者との直接的な従属関係から大王権による組織化された関係へと変化した可能性を考えておきたい。陪塚被葬者の大王権による組織化は、陪塚被葬者の大王権に基づく権力の部分的な掌握と共に、在地首長と大王権との関係に大きな変化をもたらしたことが考えられる。

6 陪塚の変遷からみた古墳時代中期の社会構造

古墳時代五～六期の畿内における前方後方墳の急激な減少〔都出 1988〕と帆立貝形前方後円墳の成立による古墳秩序の大きな変化〔小野山 1970〕は、大王権による在地首長の伝統的支配関係の再編成を意図した可能性が考えられる。主墳の周囲に企画的に配置される陪塚は、こうした古墳秩序の画期と時期を同じくして五期に成立した。陪塚被葬者の性格は陪塚被葬者に供される副葬品の脆弱さや主墳より時期の降る陪塚の存在を積極的に評価すれば、主墳被葬者と直接的な従属関係にある人物である可能性を指摘した。また陪塚被葬者は五～七期にかけての陪塚の墳形や規模及び個人に供される副葬品の脆弱さから、有力首長のように独自の勢力を在地に有する首長層を組み込んだものではなく、成立当初方墳しか築きえなかった階層を想定した。

多量の鉄製農・工具や鉄製武器の儀礼的埋納と同時に同一の墳丘に埋葬された被葬者を積極的に評価すると陪塚被葬者は、儀礼の執行の一部を担った人物像が想定される。また野中古墳における多量の武具の埋納は、古墳祭式の威信具の武具への変化と祭式の壮大化を表出しているが、こうした武具の配列や構造の緻密な分析からは、陪塚被葬者の性格とともに、軍事組織の一端を読み取れる可能性を秘めている。

陪塚に集中的に埋納される鉄製品からは、大王権における鉄資源の潤沢な供給体制の掌握と鉄器生産体制の整備、進展を背景とした威信具の変化を読み取った。陪塚における墳形や規模、陪塚被葬者に供される副葬品の時期的変化からは、陪塚被葬者の階層の上昇を読み取り、陪塚被葬者は被支配者に対して大王の強大な権力のもと、徐々に権力の一部を掌握することによって、陪塚被葬者の階層が上昇した可能性を考えた。

九期にいたって陪塚の墳形及び規模の向上と主墳との配置における企画性の喪失からは、古墳祭式の変化とともに陪塚被葬者の階層の向上と主墳被葬者との直接的従属関係からの脱却を読み取った。こうした変化によって、陪塚被葬者は主墳被葬者のもとで視覚的な権威付けを必要としないまでに成長し、主墳周囲に随伴するような陪塚は廃絶していったものと考え、陪塚被葬者は主墳被葬者との直接的な従属関係から大王権の権力を執行する機関として王権内に組織化され、より制度化されていった可能性を指摘しておきたい。

陪塚被葬者の王権内における組織化と階層の上昇は、王権の地域支配体制に大きな影響を与えたものと考えられ、在地首長における伝統的支配権との間に軋轢が生じたことは十分に考えられる。5世紀後葉以降の在地首長墓における画期は、こうした王権内に組織化された陪塚被葬者階層における在地支配権への影響力の増大とともに、地域支配者の再編成を契機として、在地首長の伝統的支配権を脅かしたものと考えられる。

五期における陪塚成立時の画期と比較して一〇期における陪塚の廃絶と在地首長墓の「変動」に認められる画期こそ、王権の在地支配体制の本質的な変革として位置づけられるものと想定し、大王権内に機構を通じての支配体制が五期から九期にいたって模索され、九期から一〇期にいたって整備されたものと考えたい。